

# 主体・環境・人間

浅野慎一『人間的な自然と社会環境：人間発達の学をめざして』大学教育出版、2005年

## 序. 基本的な問題意識

人類：自ら創出した「生産力＝破壊力」により、自らの「生命－生活(life)」の存続を危機に。

①20世紀中葉：核兵器の開発・使用→可視化。(←物理学) 「非人間的＝人間的」行為。

②20世紀後半：自然環境破壊→日常化。(←化学的汚染)

③20世紀末～21世紀初頭：自らの生物的進化に直接介入。ポスト・ゲノム時代。(←分子生物学)。

ホモ・サピエンスとしての同一性の維持をめぐる岐路。

テンニース「実に人間は、理性によって自己自身を破壊する能力を有している」<sup>1)</sup>

→現代の人類危機の克服をめざす人間(発達)のあり方を根底的(radical)に考察。

マルクス「ラディカルであるとは、ものごとを根本からつかむことである。

ところで、人間にとっての根本は、人間そのものである」<sup>2)</sup>

## 第I部 人間環境と自然・社会

### 第1章 環境・主体・人間

《批判すべき「常識」》

環境破壊の原因は、人間の、あまりに“人間中心主義”的な発想・行為だ。だから“人間中心主義”を見直し、他の生命体も含む“生命圏平等主義”等への発想の転換が大切だ。

#### 【1. 環境と主体】

環境＝主体があって初めて成立。

主体と環境＝相互作用の中で互いを成立。

環境＝主体にとって何らかの意味をもつ事象の総和。

#### 【2. 人間中心主義批判の諸潮流】

人間＝様々な主体を想定可能。ex)絶滅危惧生物、地球、遺伝子、肉牛、ロブスター等。

自然環境の人為的破壊→“人間中心主義”批判が隆盛。

ex)自然物を原告とする環境保護訴訟。一部の菜食主義。“残酷”な料理法を批判する動物愛護運動。

動物実験・工業的畜産を批判、「動物の解放」論。

地球の負荷軽減のため、人口抑制を主張する環境保護運動。

「真のエコロジストは子供を作らない」。

環境倫理学：加藤尚武<sup>3)</sup>、「自然の生存権」。

「人間には他の生物よりも生存の優先権があるという人間優先主義を否定しなければならない」

「人間だけが増える権利をもつから、人間が増えすぎる。環境問題の本質は人口問題である。地球の上の人間の数が多すぎる」

「地球全体の生態系の生命を守るために、人間という個別種の生存数は制限されなければならない」

環境社会学：“人間中心主義”を批判。「パラダイム転換の学」。

飯島伸子<sup>4)</sup>：人間特例主義批判＝「日本の環境社会学者の間に共感を広げ」、「世界的に環境社会学が広まっていく出発点を用意」。

人間中心主義批判の源流＝レオポルド<sup>5)</sup>

自然＝人間にとっての資源、ロマン主義的な価値である以前に、それ自体の固有の価値をもつ。

生態学的な連鎖の中で、そのすべての構成員の平等性に基礎をおいた倫理的判断が大切。

自然を開発すべきものと捉えるのではなく、自らがそこに所属しているものと捉える必要。

ディープ・エコロジー：ネス<sup>6)</sup>。

“人間中心主義”に立つ自然保護＝シャロー・エコロジー。

“生命圏平等主義”を主張。

すべての生命体＝生態系・相互関連の中で自己開花・自己実現する本質的価値と平等な権利をもつ。

人口削減を主張。

A I（人工知能）研究、バーチャル・リアリティ装置、ゲノム研究・遺伝子操作等  
→ “人間中心主義” を動揺。

### 【3. 主体としての人間】

人間にとっての主体＝人間。

人間が捉える環境＝人間にとって何らかの意味ある事象の総和。

人間以外の様々な主体を想定・認識している主体＝人間。

ex) 被告にならない「自然」、動物以外の生命は食べる菜食主義、天然痘ウィルスの「解放?」、人間の利益のための無農薬有機栽培。

人間の認識としてのガイア論・「利己的な遺伝子」論・“人間中心主義” 批判。

ネス<sup>7)</sup>：「生命圏平等主義の原理は、これまで時々誤解され、人間の必要は人間以外のものたちの必要にたいしてけっして優先されるべきものではないことを意味していると受け取られた。しかしこのような意図はまったくない。実際において私たちは、たとえば私たちにより近いものに対しより大きな責務を負う。これは、義務には時として人間以外のものの殺生や傷害が含まれることを意味している」。「私たちのような頭脳をもち、あらゆる種類の生物との緊密な相互作用のなかで何億年かけて発達してきた存在者は、狭い意味で人間というこの生物種に有益であるのみならず、全き多様性と複合性のうちにある生態系全体に対しても有益な生き方を必然的に支持するものである、というのが私の期待である。この生態圏のなかの独特の才能に恵まれた一部分が、生態圏の永遠の敵にはならないだろう」。

“人間中心主義” 批判の限界・問題点

人間＝主体的に環境に働きかけ、環境を大きく改変。ex) 自然環境破壊 & 保全。

“人間中心主義” 批判：「人間も他の生物種と同様、自然の一部にすぎない」。  
＝人間固有の主体性を看過。

人間＝自然の一部。BUT 自らを含む自然を根底的に破壊、保全する可能性をもつ特別な主体。

環境倫理学・環境社会学、“人間中心主義” 批判

＝人間にとっての環境保全を目指す、人間の主体的・知的な営み。

「地球／自然に優しい」＝「人間に優しい地球・自然環境」を維持・形成する人間自身の主体的行為。

「持続可能性 (sustainability)」：何が「持続可能」たるべきか？。

＝人間の「生命－生活 (life)」を可能にする環境。

環境を問うこと＝主体を問うこと＝人間を問うこと。

### 【4. 人間とは何か】

科学（生物学、人文・社会科学等）：ヒト（ホモ・サピエンス）＝人間。

特に第2次世界大戦以降、「人権」思想の一般化とともに。

BUT 「ヒト＝人間」→ “人間中心主義” は必然的には出てこない。

① 「人間中心主義」＝人間と他生物種との間に断絶性を承認。

BUT 実際の生物種：連続性をもつ。ex) 同じヒト科の類人猿とヒト。

② 進化論。生物種としてのヒトの多様性。

ex) アウストラロピテクス、ホモ・エレクトゥス、ネアンデルタール人、ホモ・サピエンス、今後、ポスト・ホモ・サピエンス？

③ 個体発生。どこからどこまでが「人間」か？

誕生・死の瞬間＝客観的確定は不可能。連続的な過程 & 社会的に構築。

ex) 3兆候死、脳死、中絶、受精、クローン

エンゲルス<sup>7)</sup> 「日常の場合には、われわれはたとえば、ある動物が生きているか生きていないかを知っているし、はっきり言うことができる。けれども、もっと詳しく研究してみると、これはしばしばきわめて複雑な問題であることがわかる。これは、ここからさきは胎児の致死が殺人になるという合理的な境い目を見つけようとして、さんざんむだ骨折りをしたことのある法律家たちが、よく知っていることである。また同様に、死の瞬間を確定することも不可能である。というのは、生理学が明らかにするところでは、死というものは一度でかたづ

く瞬間的な出来事ではなくて、非常に長びく過程だからである」。

重要な課題：人間中心主義の徹底、“人間の間人間による人間のための主体－環境形成”。

BUT 同時に、その前提となる「人間とは何か」、「人間の『生命－生活 (life) 』とは何か」。

→自然科学と人文・社会科学の枠を超えた根底的な人間観－環境観の再構築。

## 【5. まとめ】

《批判すべき「常識」》

環境破壊の原因は、人間の、あまりに“人間中心主義”的な発想・行為だ。だから“人間中心主義”を見直し、他の生命体も含む“生命圏平等主義”等への発想の転換が大切だ。

**NO!** 環境破壊の原因＝“人間中心主義”の喪失。(≠“人間中心主義”への固執)

環境破壊＝人間の「生命＝生活 (life)」にとって不適切な環境の創造。

「地球／自然に優しい」行為＝「人間に優しい地球／自然環境」を維持・形成する人間自身の主体的行為。

「持続可能性 (sustainability)」の追求＝人間の「生命－生活」の(より長期的な)持続を可能にする環境の追求。

∴ 重要な課題：“人間中心主義”の復権。“人間の間人間による人間のための環境形成”。

BUT 同時に、その前提となる「人間とは何か?」、「人間の『生命－生活』とは何か?」

→自然科学と人文・社会科学の枠を超えた根底的な人間観・環境観の再構築。

## 補注・参考文献

- 1) テンニエス、F. (1957) (杉之原寿一訳) 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』下、岩波文庫
- 2) マルクス、K. (1959) 「ヘーゲル法哲学批判」『マルクス・エンゲルス全集』1巻、大月書店
- 3) 加藤尚武 (1991) 『環境倫理学のすすめ』丸善ライブラリー、1・2・13頁。
- 4) 飯島伸子 (1998) 「環境問題の歴史と環境社会学」船橋晴俊・飯島伸子編『講座社会学・12 環境』東京大学出版会、15頁。
- 5) レオポルド、A. (1997) (新島義昭訳) 『野生のうたが聞こえる』講談社
- 6) ネス、A. (1997) (斎藤直輔・開龍美訳) 『ディープ・エコロジーとは何か』文化書房博文社、271・339～340頁。
- 7) エンゲルス (1968) (寺沢恒信・村田陽一訳) 「空想から科学への社会主義の発展」『マルクス・エンゲルス全集』19巻、大月書店、201頁。